

MACF 礼拝説教要旨

2020年8月2日

「神を誇りにしている」

ローマの信徒への手紙 5章 10節～11節

5:10 「敵」であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。

5:11 それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは「神を誇り」としています。

今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

+++++

前の節からのつながりで考えていくとわかりやすいので、その部分を引用しておきます。

5:6 実にキリストは、わたしたちがまだ「弱かった」ころ、定められた時に、「不信心な者」のために死んでくださった。

5:7 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。

5:8 しかし、わたしたちがまだ「罪人」であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。

5:9 それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

神様のまえに「無能力」「不信心」「罪人」「怒りの下に置かれていた人間」「神の敵」という存在だった私たちに対して神は、深い愛をお示しになりました。

そしてキリストはそんな私たちのために死んでくださいました。

つまり、いのちをかけて「模範を示し」いのちをかけて「罪を贖って」くださいました。

それほどまでに愛された私たちが受け取っている「救い」とはどういうものなのでしょう。

ある人にとって「救い」とは「社会的な成功」「病の癒し」「人間関係改善」「悪い習慣からの脱却」「心の清め」などを意味しているかもしれません。

それは大切な救いの一部です。

でも、パウロはこの章の中で救われた人間が「根底から変わる要素」を書き出しています。

それが「5:11 それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは「神を誇り」としています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。」という言葉です。

神との和解がもたらされ、赦され、愛され、解放が届いて、一番、重要な心の変化は「神を誇りとする」「神を喜ぶ」という出来事だとパウロは語るのです。

今までは自分がまるで神のようであり、自分がよければそれで良い、自分の不具合や不都合が直ればそれで十分と考えていた私たちにとって、神の愛に触れた時、自分の状況はさておいて「神を喜べるようになる」「神様、いてくださってありがとうございます」と言えるようになることこそ最大の土台の変化なのです。

つまり、病気が治らなくても、状況があまり好転しなくても「神を喜ぶことができる」と、そこに希望が生まれるのです。上を向いて、前に進めるようになってくるのです。

救いは私が自分の心を深く見つめて祝福を味わうという面はあるのですが、その前に「神の愛を感じ、神に向かって感謝する」「神様を大いに喜ぶ」ことによって、その救いの内容がさらに深く、さらに大きくなっていくのです。

あなたは神様と関わり、イエス様の十字架の愛が教えられてから、何が変わりましたか？

どんな姿勢が変わりましたか？

この部分、あの部分、あのこと、このこと、いろいろあるでしょう。

でも、まず「神を喜びつつ生きられるようになった」とすれば、それはボタンのかけ違いを起こしていない証拠だと思います。

私たちは、救われたと教えられているのに、どうして自分の思い通りに良いことが起こらないのだろうと腹を立

て、神様も救いもいらないと離れてしまう人たちも多い
のです。

残念な、とてももったいないことです。

救いのもたらす最初の変化は「神をよろこべるよにな
る」ということです。

自分の状況が必ずしも大きな変化を経験しなくても「神
がおられ、そのお方に愛され守られているとわかり「神
様、いてくださってありがとうございます」と挨拶でき
ると、安心が心に広がります。

理不尽な出来事の中でさえ、神を喜べたら、心に大きな
変化が起こります。

パウロの晩年はほとんど牢獄生活でした。でも、彼は「神
を喜んで」生きたのです。

神を喜びつつ生きる姿勢、それが私たちの生活の中に根
づきますように。

++++++